

# OMM JAPAN 2020 イベントディレクターレポート

はじめに、1968年にイギリスで生まれ、それから毎年かならず開催されてきた本国のTHE OMMは、その53年の歴史の中で、今年始めてイベント中止という苦渋の決断をせざるを得ませんでした。歴史や伝統に対して他のどの国よりも誇りを持つイギリスで、この辛い決断をせざるを得なかったUKイベントチームの喪失感はとても計り知れるものではありません。

そんな彼らから9月のイベント中止発表の直前にもかかわらず「2020年のOMMは日本だけになってしまったけれど、今日からUKチーム全員で日本の成功を心から祈るよ」という励ましの連絡をもらった時は心が震えました。

そして今日、このOMM JAPAN 2020 イベントレポートを今年も無事に執筆できる喜びと感謝の気持ちを、まずはUKチーム全員に贈りたいと思います。

2020年は、OMM JAPAN運営チームにとっても例年とはまったく質の異なるチャレンジの年となりました。いつ、どのように襲いかかってくるのか、誰にも分からない「驚異」に対して、私たちにできる備えや対策はあまりにも少なく限られ、それらを万全に準備したとしても無事に開催できる可能性は常に五分にしかならない情勢でした。

しかし、そんな中でも開催に向けて強く背中を押してくれたものはやはり、正解ではなく、最善を尽くすことに全力を注ぎ「進む」という、OMMのチャレンジスピリットそのものでした。

7月の開催発表とともに渦中における開催意図を公開しました。8月1日のエントリー開始日はちょうど「驚異」の第2波真ただ中にありましたが、それでも開催の可能性を信じてイベントにエントリーしてくれたチームは最終的に約500組/1000人にもなりました。

イベントが中止となるリスクを受け入れて、事前にエントリーをしてくれたチームがこれだけ集まってくれたことは、まさにOMMは運営チームと参加者で「共に作り上げる」イベントなのだというマインドが確実に浸透しているのだと強く実感できる機会にもなりました。

あらためて、今年 OMM JAPAN 2020 NOZAWA ONSEN にエントリーをし、我々運営チームと共にイベントを作り上げてくれた全参加者の皆様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。また来年以降のOMMに向けても最善を尽くし、参加者と共に最高の舞台を作り上げられるよう、引き続き全力で準備を進めていきたいと思います。

## 評価・課題・反省

### 1. 開催地

スタート直後から続く急登、山深く、そして険しい植生、その深くに突如として現れる原生林や、ふと開けた場所から見える妙高山をはじめとした美しい信越の山々、それらのすべてがきつと2日間の壮大なチャレンジに挑んだ皆さんにとっては特別な情景として心に刻まれたことと思えます。

野沢温泉エリアの渉外を始めたのは2019年の年末、当時は2021年の開催地として現地と

調整を進めていました。すでに2020年の開催地はその約1年前から別のエリアで決まっており、地元自治体や関係企業、団体と順調に準備を進めていましたが、その状況が一変したのが2月の中旬、環境省、森林管理署、県環境課、地域の環境保護団体が一同に集まる意見交換会が催された際の話し合いの席で、どうしても埋めることのできない山や自然の利用価値観の違いから、このエリアでは参加者の期待に応えられるOMM JAPANは開催できないと判断し、それまで進めていたすべてを白紙撤回することを決断しました。

それから1週間内に今回の開催地となった野沢温泉エリアに急遽1年前倒しで開催させてもらいたい意向を伝え地元からは概ね了承を得られるも、その後すぐにCOVID-19による自粛期間の影響で直接現地で調整をすることが難しくなり、最終的に自治体、行政から正式に承諾を得られたのは6月初旬でした。

常識で考えればほぼ年内の開催は諦めざるえないような厳しいスケジュールのうえ、未曾有のパンデミックによる驚異の渦中という最悪の状況のなかで、奇跡的にも今年OMM JAPANを開催できたことは、一重に野沢温泉村地域住民の皆様のご理解と、なによりもこの地域に根付く歴史ある観光地としてのプライドと「受け入れる」という姿勢に助けてもらったという他にありません。あらためて野沢温泉村、栄村の関係各所の皆様、地域住民の皆さまに心から感謝申し上げます。

またこのような非常にタイトなスケジュールの中でも、ともに年内開催の実現に向けて尽力してくれた渉外担当の我部乱と、素晴らしいコースを作り上げてくれたプランナーチーム、安全管理チームにもこの場を借りてあらためて感謝します。

毎年開催地が変わるというOMMイベントの特性上、やはりこの開催地選出とそれからの渉外が運営のうえでもっともハードルの高い要素であることは明白ですが、だからこそ我々運営チームがこの毎年の経験から学ぶべきは、なによりも先ず受け入れ側である地元の自治体、住民が大切にしている山や自然・土地に対する考えや価値観を理解すること、そのうえで私たちOMMが実現したいことを丁寧に伝え、地元から快く協力してもらえよう真摯に向き合う姿勢を貫くことなのだと思われました。

来年以降の準備もすでに進んでいますが、これまでの経験を糧に丁寧に渉外を進めてきたいと思います。

## 2. コース

今年は例年に比べて厳しい登り下りとハードな「藪」に苦しめられたチームも多かったのでは無いかと思います。とくに地形だけではなく植生もルートチョイスの重要な判断基準となったという点では、毎年参加している熟練のコンペティターにとってもOMMのルートチョイスの奥深さを経験できた年になったのではないのでしょうか。

それらコースについての反省、課題の詳しくは各コースプランナーのレポートを御覧ください。

### 3. イベントセンター

・今年のイベントセンターもスキー場施設内ではありましたが、COVID-19感染予防対策として、受付を含むすべてを屋外で行うことを事前から決めていました。屋外の会場設営は屋内に比べて必要な資材の多さや電力の問題、なにより当日の現地の気候から寒さ対策、天候対策など課題が多く非常に難易度の高いものになることを想定して万全の準備で当日の設営に臨みました。

結果としては広い芝生の上で、焚き火の暖かな空間、屋外ならではの音楽の響き、受付からショップ、バー、メーカーブースまで、夜の暗がりの中に美しく輝るOMMらしい一体感のあるイベントセンターを作ることができたことは非常に大きな成果と収穫でした。

もちろん前日祭、日曜日ともに天候に恵まれたことが大前提ではありましたが、今後は直前の天候を注視しながらイベントセンターを屋内と屋外でうまく切り替えられるようなフレキシブルなオプションも前向きに検討したいとおもいます。

・今年は駐車場からイベントセンターまでの距離が非常に遠く、オペレーションの難度が高いことを予想していましたが、当日は駐車場からシャトルバスを運行していただいたり、「動く歩道遊ロード」を稼働し頂いたり、現地のご協力のおかげで大きな問題もなく、参加者にはスムーズに移動していただくことができました。

しかし数組の参加者が直接車でイベントセンターまで来場してしまうということも見られました。今回のようなケースの年には、事前の周知をより強化したいと思います。

### 4. オーバーナイトキャンプ

・今年は山の最も高い位置に突如として現れる美しい湖の畔というロケーションでのオーバーナイトキャンプとなりました。夏期はキャンプ場として営業されているため、水、トイレ等のファシリティも整っていたため参加者にとっては景色、設備ともに非常に快適なキャンプだったのではないかと思います。オーバーナイトキャンプはOMM参加者にとって毎年楽しみのひとつとなるよう今後もできる限り特徴的な場を用意できるようにしたいと思います。

・キャンプ場に常設された炊事場の使用について、常識の範囲内でこれらの常設設備を使用することはOMMのチャレンジングな2日間にとくに大きな影響は無いと判断して、今年をあえて制限をもうけずに開放しました。しかし残念ながらこの場を利用して夜遅くまで大きな声で宴会があったという報告がありました。翌日のスタート時刻が早朝となる大半のチームにとっては、しっかりと休息をとることも困難となりレースに大きな影響となると判断せざるを得ません。来年以降の常設設備利用の制限については慎重に検討したいと思います。

・イベント3日前に降った雪が最大で20cm以上積もり当日もこの雪が残る可能性も十分に考えられたため事前にキャンプサイトの状況をメール・SNSで共有しました。結果として当日は雪は溶けましたが、キャンプサイト付近の天候、気温等の予報や、現地のコンディションについては参加者の装備の判断基準、また安全確保に大きな影響を与えるので、来年以降も事前周知をより強化したいと思います。

・今年も常設・仮設ともにトイレが分散するレイアウトのため、キャンプサイト内に数箇所のマップを掲示しました。しかし特に仮設トイレの場所がわかりにくく、参加者が常設のいくつかのトイレに集中してしまう状況がみられました。来年以降はMAPとともにトイレのサインを増やす、より目視しやすい位置に仮設トイレを設置するよう心がける等、改善したいと思います。

## 5. マーシャル・スタッフ・ボランティア

まずはじめに、このような状況の中にも関わらず今年イベントスタッフ・ボランティアとしてOMM運営チームに加わってくれたすべての仲間達に心から感謝を贈ります。

・近年は毎年参加してくれるスタッフ・ボランティアも増え、気心のしれた仲間たちが、各チーム、セクション内、またセクションを越えて能動的に動くチームワークが際立つようになったことを本当に心強くまた誇りに思います。今後も運営チームが一丸となってイベント成功に向けて頑張れる雰囲気を作っていきたいと思います。

・今年は競技チーム、受付チームのディレクターが交代となり、運営チームの核となる2つが新体制で臨むという大きな変化の年でした。しかしCOVID-19をはじめ例年どおりにはできないことや、準備しなければならないことも多かったにもかかわらず、実際には過去もっともスムーズな運営となりました。各チーム内での前任担当者による確実な引き継ぎと、何よりもディレクターの責任感と努力によってこのような大きな成果が得られたことは、今後のOMM運営チームの成長にとって非常に大きな一歩だと感じています。

来年は安全管理チームのディレクターが交代となる予定ですが、今年と同様に確実に引き継ぎができるよう連携をとって臨みたいと思います。

・ここ数年の課題となっていた設営チームを今季から本格的に競技チームから独立させました。イベントセンター・駐車場・キャンプサイト・スタート・フィニッシュ、これらすべてのプランニングから当日の設営、撤収まで遂行する設営チームはもっともタフなセクションともいえますが、今年は主催ノマディクスから全チームメンバーを派遣しました。

結果として素晴らしいチームワークと意思疎通、競技チームとの連携までこれまでにないクオリティとスピードでイベントにおける重要なビジュアルを作り上げてくれました。

来年以降はこのチームを中心にさらに設営チームのコミュニティを広げていきたいと思います。

# THANK YOU FOR ALL

OMM JAPAN 2020 NOZAWA ONSENをともに作り上げてくれた仲間感謝を贈ります。

## TEAM OMM JAPAN

Communications Director Jeff Jensen (株式会社ノマディクス)

渉外 我部乱 (有限会社エクストレモ)

Event HeadQuarter 野村治子 (株式会社ノマディクス)

設営 TEAM NOMADICS

安全管理マネージャー 村越真 (NPO 法人 M-nop) 、早川秀人

Technical Director 小泉成行 (以下、公益社団法人日本オリエンテーリング協会)

Course Planner 谷川友太、小泉成行

計測・リザルト 福西佑紀

スタート・フィニッシュ 田畑清士、近藤康満

スタッフ・ボランティアとして参加してくれた皆様

野沢温泉村

株式会社野沢温泉

一般社団法人野沢温泉観光協会

野沢温泉スポーツサービス株式会社

栄村

栄村秋山郷観光協会

### **ALL Competitors**

OMM JAPAN 2020 NOZAWA ONSENに参加してくれたすべてのコンペティターの皆様

OMM JAPAN EventDirector

小峯秀行